

[特集 研究ノート]

日本の植民地支配の文化的記憶と歴史ドラマ： 関連概念の整理

Japan's Cultural Memory of its Colonial Rules and Historical Dramas:
Clarifying Key Concepts

河合優子

Yuko KAWAI

キーワード

文化的記憶、集合的記憶、忘却と無知、ナラティブ、アイデンティティ

Abstract: This paper discusses key concepts relevant to examining cultural forgetting of Japan's colonial rules in historical television dramas. Japan's cultural memory of its colonial past is one of the most critical issues to address for better relationships with other Asian countries. However, the Japanese compulsory education curriculum does not teach about the past sufficiently, and Japanese popular culture rarely represents it. Television dramas, one of the most everyday and thus salient sources of narrative, can play a major role in cultural memory. The concepts to be discussed here include collective memory, cultural memory, narrative, public history, identity, forgetting, ignorance, and nation.

43

1. はじめに

日本の人々がアジアの人々と共生していくためには、日本による植民地支配の文化的記憶のあり方が一つの大きな課題である。歴史的な加害の文化的記憶のあり方に歴史ドラマは大きな役割を果たしうる。例えば、ドイツのホロコーストについての想起は戦後すぐに開始されたわけではなく、1979年に当時の西ドイツで放送されたアメリカの連続テレビドラマ『ホロコースト』がきっかけの一つだったという（アスマン、2019、p. 54）。このドラマは、架空のユダヤ人家族の運命を描き、「初めて社会全体が、ユダヤ人被害者に対する共感にとらえられた」（アスマン、2019、p. 54）のである。

日本の植民地支配について中等教育までの歴史教育で十分に教えられていたり、テレビドラマなどの大衆文化で表象されることも少ない。日本の近代を扱った歴史ドラマでは、西洋との

関係性が詳細に描かれる一方で、植民地支配がかかわるアジアについては描かれないことが多い。記憶には想起と忘却が同時にかかわるが、1990年代以降に歴史修正主義の影響力が強まる中で、想起に関する議論は展開されていても、忘却についての議論は十分に行われてきたとはいえない。記憶研究で、これまで主に概念的議論がなされてきたのは想起であり、忘却についての本格的な概念的議論は開始されたばかりである（例えば、Plate, 2016）。本稿は、日本のアジア各地の植民地支配に関する忘却に歴史ドラマが果たす役割を考えるために、それにかかわる諸概念を整理することを目的とする。

2. 集合的記憶と文化的記憶

記憶を個人的行為ではなく社会的行為としてとらえた研究は、とくに1980年代後半から1990年代に入って活発化した。ドイツの記憶研究者アストリッド・エアル（2022, pp. 25-27）は、その要因として（1）歴史、（2）メディア、（3）理論の三つの側面を挙げている。一つ目の歴史的側面は、まず戦後40年が経過し、第二次世界大戦を直接経験した世代がいなくなりつつあったこと、そして冷戦の終焉、南アフリカのアパルトヘイトなど権威主義的な政治体制の崩壊、移民の増加などにより、マイノリティーの視点から過去を理解することが重要視されるようになったことがある。二つ目のメディアからの側面では、デジタル革命により大量のデータを記憶できるようになったこと、歴史に関する映画やテレビ番組、書籍などの人気が高まったことを指摘している。そして、三つ目の理論的側面では、ポストモダン主義やポスト構造主義の影響から、歴史は単一のもので客観的に存在し、進歩するものといった見方が揺らぎ、歴史は過去を表象するナラティブとして構築され、時代そして著者によって多様な語りが存在するという歴史観が広まったことがある。

記憶を社会的にとらえた研究は、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスが1925年に出版した『記憶の社会的枠組み』（アルヴァックス, 2018）、そしてナチスによって収容所に送られそこで命を奪われた後に出版された著作『集合的記憶』（アルヴァックス, 1989）に遡ることができる。アルヴァックスは、個々人の記憶は個人的なものではありえず、人々が生きる社会やそこで獲得する物理的かつ思考の枠組みに影響されること、つまり記憶は社会的かつ現在のなものであり、かつ社会のあり方によって異なる複数性をもつものとしてとらえた。

アルヴァックスの集合的記憶論は戦後忘れられていたが、1980年代にフランスの歴史学者ピエール・ノラ編集の『記憶の場』が出版されることで再発見・再評価が始まった。そして歴史学の他、社会学、文化人類学、心理学、文学、メディア研究などで、記憶を社会的にとらえた研究は90年代以降本格化していくことになる。日本においても2000年代に入って『記憶の場』が翻訳されるなど、記憶研究の理論書の翻訳、そして記憶を社会的にとらえたさまざまな学術分野からの研究書の出版が増加していく（例えば、石田, 2000; 岡, 2000; リクール, 2004; モーリス・スズキ, 2004; アスマン, 2007; 板垣・鄭・岩崎編, 2011; 浜井編, 2017; アルヴァックス, 2018; アスマン, 2019; 金, 2020; エアル, 2022; 山名編, 2022; 浅野編, 2023）。

ジェフリー・オーリック（Olick, 2011）によると、集合的記憶（collective memory）研究には二つのアプローチがある。一つは「集められた記憶 collected memory」で、記憶は社会的な影響を受けるとしても個人に存在するものであり、それらが蓄積したものが集合的記憶だとする立場である（pp. 225-6）。この立場では心理学そして神経学的要因まで考慮に入れる。もう一つは「集団的記憶 collective memory」であり、集団がアイデンティティをもつように、集団的記

憶は個人の記憶の総体以上のものとする立場である (pp.226-7)。そしてこの集団的記憶は実践 (例えば、追悼、表象、否定、承認など) とその成果物 (例えば、物語、儀式、書籍、写真、歴史など) を指し、社会的であると同時に個人的である (Olick, 2010, p.158)。文化的記憶は後者のアプローチに含まれる。

記憶を社会的にとらえた概念には、集合的記憶以外にも、社会的記憶や文化的記憶などがある。集合的記憶そして社会的記憶という語を使った研究は、人に焦点を当て、人がどのような記憶を社会的に構築し、それがどのように社会関係に影響を与えるのかを問う傾向があるのに対し、文化的記憶はそのような集合的・社会的記憶の文化的基盤に焦点を当て、メディア技術や作品 (演劇、映画、ドラマ、文学など) を分析対象とする傾向がある (Rigney, 2015, p.66)。

文化的記憶はドイツのヤン・アスマンとアライダ・アスマンを中心に議論されてきた概念である。ヤン・アスマンはアルヴァックスの集合的記憶と文化的記憶という概念を区別するため、記憶をコミュニケーションの記憶と文化的記憶に分けた (J. Assmann, 2010)。アルヴァックスの集合的記憶に相当するコミュニケーションの記憶とは、日常のコミュニケーションで人が自分や家族の体験について直接的に行うものであり、80年から100年程度の時間に限定される。例えば、第二次世界大戦時の体験を親、祖父母が直接話すようなケースである。一方、文化的記憶はコミュニケーション的記憶の時間枠の後に、記憶が文化財や芸術作品、メディア作品として表象され、保存され、後の世代に伝承される制度化された記憶である。ある出来事を直接体験した人がこの世を去ると、コミュニケーションの記憶は途絶えていく。しかし特定の過去の出来事については、印刷メディア (本、新聞、雑誌など)、電子メディア (映画、テレビ、インターネット)、博物館、歴史教育などによって制度化されることで、文化的記憶となっていく。個々人によるコミュニケーション的記憶の構築とは異なり、文化的記憶は政府、メディア産業、学校、専門家、諸団体などの制度的機関が関わり、その文化の知を構成していく。記憶は個々人や、個々人が属する集団についての知であり、記憶をつくることはアイデンティティをつくることでもある (J. Assmann, 2010, pp.113-4)。

アライダ・アスマン (A. Assmann, 2010) は、文化的記憶を想起と忘却とに分けて詳細な理論化を試みている。文化的想起と忘却はそれぞれ能動的、受動的な形態がある。文化的想起は能動的な「規範 canon」と受動的な「アーカイブ archive」に分けられる。「規範」は過去を現在として保存するもので、ある過去を継続して想起することによってそれが「規範」となり、人々の記憶に刻まれ続けることである。「アーカイブ」とは過去を過去として保存することで、「規範」のように現在において継続的に想起されることはないが、蓄積されることで後世に「規範」となる可能性を秘めているものである。「アーカイブ」は想起と忘却の間に位置するもので、その記憶はデータとして保存されていても、「規範」のように現在において繰り返し想起されることはないが、未来に想起される可能性を残している。そして、能動的忘却は意図的にある記憶を隠蔽、破壊、抹殺することであり、それがマイノリティーに向けられる場合には暴力的になる (p. 98)。受動的忘却はある記憶が非意図的に失われたり、注意に向けられなかったりして忘れられることである。

エアルが「文化的記憶はメディアを介したコミュニケーションにもとづく」(Erll, 2010, p.390) と述べているように、文化的記憶の構築は記憶を媒介するものとしてのメディアが不可欠である。メディア (medium) とは媒体、何か (思考、意味、情報など) をある地点から別の地点の間に入って伝える手段であり、文字、絵、インターネット、博物館まで多様なものがメディアに含まれる。エアルはメディアを物的領域と社会的領域に分け、さらに前者を三つの要素に分けている (エアル, 2022, pp.175-181)。メディアの物的領域の一つ目の要素は、音声言語、

文字言語、音、図像、映像といった手段、二つ目の要素は、紙、印刷、テレビ、インターネットなどの技術、三つ目の要素は、物語、絵画、記念碑といった内容（コンテンツ）である。つまり、過去の出来事を主に音声言語、音、映像など（手段）を使い、テレビ放送（技術）のためにつくったドラマ（内容）が歴史ドラマとなる。そして社会的領域とは、あるメディア（内容）が記憶メディアとして固定化、機能化されていく側面を指す。例えば、日本の歴史をテレビドラマとして固定化したのがNHK大河ドラマであり、日本に住む人々が大河ドラマを視聴することで日本の歴史を想起することは大河ドラマが記憶メディアとして機能していることを示す。

エアル（2022）は、集合的記憶を「生物的な、心理的な、メディア的な、そして社会的な諸事象の上位概念であり、そうした諸事象の意味は過去、現在、未来が文化のそれぞれの文脈に応じて相互に作用し合うことによって獲得される」（p.29）と広く定義している。集合的記憶は、生物的そして心理的な個人のミクロレベルの記憶から社会そしてメディアがかかわるマクロレベルのものを含む総合的な概念であり、メディア的な記憶に焦点を当てる文化的記憶は集合的記憶の下位概念として位置づけることができる。そして、記憶は、現在から過去を見るだけでなく現在における未来のイメージが過去の見方に影響するという意味で、現在と過去だけでなく未来がかかわる問題である（Leccardi, 2016, p.111-112）。現在の日本における自らの植民地支配の忘却、つまり日本のアジア地域での植民地支配の過去の現在からのとらえ方は、日本が創出したい（＝未来の）自己イメージが影響しているということになる。

3. 文化的記憶、ナラティブ、アイデンティティ、パブリック・ヒストリー

記憶装置として重要な役割を果たすナラティブは文化的記憶研究の重要概念である（例えば、Rigney, 2016, p.70）。テレビドラマも歴史もナラティブの一形式であり、歴史ドラマは二重のナラティブ性を有する。ナラティブは人類の歴史の始まりとともにあった（Barthes, 1975, p.237）と主張されるほど普遍的な文化実践であり、年齢や教育程度に関わらずあらゆる人々に開かれている。ナラティブは無数の過去の出来事からある特定のものを繋ぎ、それにより特定のバージョンの過去をつくり出し、人々を説得しようとする（例えば、Thomas, 2016, p.7）。

過去の複数の出来事を繋ぐことは、その間に因果関係を見出すことであり、それは経験と重なる（野家, 2005, p.80-91）。野家啓一は、ナラティブは「複数の出来事の中に因果関係のコンテクストを設定する役割」（野家, 2005, p.85）を果たし、経験の記述は基本的にナラティブという形式をとる（p.84）と主張する。経験とは単に何かを行ったり、感じたり、認識したりすることではなく、ある行為（出来事A）とその結果（出来事B）を因果関係のあるものとして捉えることである。例えば、中国に1年滞在した（出来事A）と述べるだけでは経験としては不十分であり、その結果、中国語と現地の文化が以前よりも理解できるようになった（出来事B）とすれば経験となり、この出来事AとBをつなげた語りがナラティブである。よって「経験が因果の関係了解である以上、経験は「物語」を語る言語行為、すなわち物語行為を離れては存在しないのであり、逆に、物語行為こそが「経験」を構成する」（野家, 2005, p.85）のである。

ナラティブ（例えば、Yuval-Davis, 1997, pp.43-44; リースマン, 2014, pp.13-15）、集合的記憶（アルヴァックス, 1989, pp.4-15）、文化的記憶（J. Assmann, 2010）は、いずれもアイデンティティと密接に関わることは以前から指摘されてきた。現代文化において、テレビドラマは最も日常的で重要なナラティブの源の一つであると同時に、人々の社会的そして個人的アイデンティティの源でもある（Thornham & Purvis, 2005, pp.27-28）。人々はテレビドラマを通して多

様なナラティブに触れ、自らもナラティブ生産に参加していくことで、社会そして自分の経験つまり過去を理解し、自分が生きる社会や自分自身のアイデンティティを構築していく。

そして、国家レベルの経験を構成するナラティブは国家の歴史ということになる。歴史は「過去の事実」という捉え方が以前は一般的だった。しかし、先述したように、記憶研究が活発化した1980年代後半から90年代にはポストモダン主義やポスト構造主義の影響で、過去を表象するナラティブとしての歴史の側面が注目されるようになる。歴史＝経験はナラティブであり、ナラティブは「経験を伝承し共同化する言語装置」（野家, 2005, p.83）であるなら、歴史＝経験＝ナラティブ実践は、記憶実践であるといえる。

ある国家の過去の特定の出来事を選択し、それをつなげて物語ることで、その国の経験＝歴史をつくり、歴史というナラティブによって過去が特定の形で想起されることが文化的記憶をつくっていく。そして、歴史というナラティブが経験を「伝承し共同化」することから、歴史＝経験＝ナラティブ＝記憶実践はアイデンティティを構築するプロセスでもある。例えば、国家が義務教育などを通じて行う歴史教育は、文化的記憶実践の一つの形態であり、その国で生きる人々に国民としてのアイデンティティをつくることに関与している。

歴史がナラティブである、つまり実践されるものであると捉えることは、歴史を専門家以外の人々にも開かれたものとする考え方につながっていく。例えば、歴史を学校の教科書や歴史書ではなく、テレビドラマやマンガや小説を通して学んだと感じている人は少なくないだろう。歴史は専門教育を受けた歴史研究者だけではなく、それ以外の人々によっても実践されるものであると捉えるのがパブリック・ヒストリーである（菅・北條編, 2021）。パブリック・ヒストリーは第二次世界大戦後のアメリカで、歴史学の専門教育を受けた学生のアカデミックな世界の外への進路の確保の必要性、公民権運動や女性運動などマイノリティの運動の活性化、芸術や人文社会系の研究や実践を支援する公的機関・資金のシステム整備、過度に専門化されたエリート主義的な歴史学への批判などを背景に1970年代に運動として登場した（菅, 2021, pp.22-24）。現在では国際的な学術団体が設立され、大学や大学院の教育課程にも組み入れられるなど、運動としてのみならず一つの研究・教育分野としても世界的規模で発展しつつある（菅, 2021, pp.24-25）。

歴史をパブリック・ヒストリーという観点から捉えると、歴史資料、歴史書、歴史教科書だけではなく、例えば、歴史についての政治家の発言、個人のオンライン上のブログ、博物館、ゲーム、マンガ、小説、ドキュメンタリー番組、映画、そしてテレビドラマなども人々の歴史認識に影響を与えうる歴史実践であるということになる。歴史ドラマも一つの歴史実践であり、そこで日本の植民地支配について想起されないことは、日本の植民地支配の忘却につながっていく。

4. 忘却と無知

想起と忘却は記憶という現象の表と裏にあたるが、相異なる過程である（エアル, 2022, p.31）。忘却の分析は難しく、エアル（2022）は「主として想起の観察という迂回路を経て再構築されなければならないことが多い」（p.149）と主張している。しかし、個人レベルでも文化レベルにおいても「忘却が原則であり、想起が例外」（A. Assmann, 2010, p.98）であれば、記憶において忘却は重要な位置を占めており、もっと忘却に注目する必要がある。

リーデッケ・プラーテ（Plate, 2016）は忘却が記憶の否定や反対と二次的なものと捉えるのは不十分であり、記憶研究の忘却学（Amnesiology）として忘却そのものを研究すべきだと主張している。先に論じたアライダ・アスマンによる二つの忘却、意図的につくりだされる能動的忘

却と非意図的な受動的忘却のうち、忘却学として研究すべきは能動的忘却である (Plate, 2016, p.144)。『現代思想』2023年6月号で無知学 (Agnotology または Ignorance Studies) が特集されたが、無知学では知らない状態にある目的のために社会的にそして意図的に構築されたものとして捉える。よって無知学とは「作られた無知という視点から歴史を眺め、その無知が誰によって／いかにして作られ、それが誰の利益／不利益になるのかを明らかにしようとする」(鶴田, 2023, pp.28-29)。プラーテが無知学ではなくあえて忘却学という語を導入するのは、記憶研究における忘却に焦点を当てるためだと述べている (Plate, 2016, pp.144-145)。

無知は認識論と密接に結びついている。チャールズ・ミルズは白人の人種に関する諸問題についての認識を「白人の無知 (white ignorance)」と呼び、それを「特別のレンズ、認識と解釈のプリズム、世界観」(Mills 2015, p.218)、より具体的には「逆さまの認識論、無知の認識論」であり、この認識論では「白人たちは一般的に自分たちが作り上げた世界をいつまでも理解できない」(ミルズ 2022, p.23) と主張している。白人の無知は世界の見方であり、そこから見える世界は屈折や反転している。白人の無知の中心は、植民地支配や奴隷制などの過去が有色人種に影響を及ぼし続けていることを認めることを拒否することである (Mills, 2015, p.219)。従来の白人の無知は白人の優位性をその優秀性を理由に正当化するものであり、現在の白人の無知はそのような優位性を完全に否定するか白人の努力のおかげだとする、といった違いがある (p.219)。

これを日本の文脈で考えると、「日本人の無知」とは、日本人のアジアに関する諸問題についての認識であり、アジアを見るときの「特別のレンズ」であり「世界観」である。アジアにおける日本の政治的、経済的、社会的、文化的などさまざま分野での近代以降の優位性を、日本人の優秀性もしくは努力のみにその要因を求めることである。例えば、旧植民地の人々からの植民地支配や侵略戦争の責任を問う声が現在も続いていることを理解できないとすれば、それは「日本人たちは一般的に自分たちが作り上げた世界をいつまでも理解できない」からということになる。

「日本人の無知」を生産するのが日本のアジアに対する植民地支配の忘却であり、忘却は無知生産実践の一形式だといえる。無知生産実践には多様なものが考えられるが、その一例がオリエンタリズムである (Alcoff, 2007, p.56)。帝国主義と植民地主義を背景とした西洋による東洋の表象、学問的な知であり、西洋の世界観であるオリエンタリズムでは、東洋 (オリент) は停滞性、不変性、非文明性、奇矯性、受動性、官能性などと結びつけられた (サイード 1993)。オリエンタリズムによって、東洋とされた地域の人々や文化に対する無知が西洋に蔓延するだけでなく、学問的な知として世界中に広まることで、西洋以外の人々の無知も誘発する。その他、歴史修正主義なども無知生産実践の具体例の一つに加えることができるだろう。

5. 文化的記憶、ネイション、アイデンティティ

「日本人の無知」とそれをつくり出す日本の植民地支配の文化的記憶のあり方は、日本のアイデンティティと密接に関わっている。アンソニー・スミス (Smith, 1996) が「記憶がなければアイデンティティはない。アイデンティティがなければネイションはない」(p.383) と主張するように、記憶とアイデンティティ、そしてネイションは不可分の関係にある。記憶は想起と同一視されがちであるが、何かを想起することは同時に何かを忘却することであり、記憶には想起と忘却の両方が関わる。エルネスト・ルナンが忘却を「それこそが国民創造に不可欠な要因」(ルナン 2022, p.14) と述べるように、想起だけではなく忘却も「想像の共同体」(アンダーソン, 2007) としてのネイションをつくるための不可欠な要素である。国民 (ネイション) は一つの集団とし

てまとまっていなかった過去を忘却し、多様な集団をまとまった一つの共同体と想像することで創造される。

このようにして創造された国民（ネイション）は、共同体についての想像を日常的に更新していくこと、言い換えると「ありふれたナショナリズム」（Billig, 1995）を実践することでネイションを維持していく。ありふれたナショナリズムとは、ネイションに関する「日常的に再生産される信念、物事を考えるときの諸前提、習慣、表象、実践の総体」（Billig 1995, p. 6）である。テレビで放映される歴史ドラマもありふれたナショナリズムの実践の一つであり、そこで日本の植民地支配の過去が忘却されることで、日本そして日本人がそれとは無関係の存在として想像され、そのようなアイデンティティがつくられていく。日本の植民地支配の忘却は、歴史認識の問題にとどまらず、日本のアイデンティティにも関わっていて、それがこの問題をより複雑なものにしている。

日本の植民地支配の忘却は、「日本人の無知」を生産することでアジアの人々との共生を阻み、歴史修正主義を蔓延させる。アジアでの植民地支配や侵略戦争での加害の過去を踏まえ、どのような日本のアイデンティティをつくっていくべきなのだろうか。本稿で論じてきた関連概念を踏まえた上で、日本の植民地支配が日本で制作され放映される歴史ドラマでどのように忘却されているのか、についての研究につなげていきたいと考えている。

参考文献

- Alcoff, L. M. (2007). Epistemologies of ignorance: Three types. S. Sullivan and N. Tuana (Eds.), *Race and epistemologies of ignorance* (pp.39-58). Albany, NY: State University of New York Press.
- アンダーソン、ベネディクト (2007). 『定本——想像の共同体』（白石隆・白石さや訳）書籍工房早山。[原著：Anderson, B. (2006). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism* (Revised edition). New York: Verso]
- 浅野豊美編 (2023). 『想起する文化をめぐる記憶の軌轢——欧州・アジアのメディア比較と歴史的考察』（和解学叢書6）明石書店。
- Assmann, A. (2010). Cannon and archive. In A. Erll and A. Nunning (Eds.), *A companion to cultural memory studies* (pp.97-107). Berlin and New York: De Gruyter.
- アスマン、アライダ (2019). 『想起の文化——忘却から対話へ』（安川晴基訳）岩波書店。[原著：Assmann, A. (2016). *Das neue Unbehagen an der Erinnerungskultur: Eine Intervention*. 2. München: C. H. Beck]
- Assmann, J. (2010). Communicative and cultural memory. In A. Erll and A. Nunning (Eds.), *A companion to cultural memory studies* (pp.109-118). Berlin and New York: De Gruyter.
- Barthes, R. (1975). An Introduction to the Structural Analysis of Narrative. *New Literary History* 6 (2), 237-272.
- Billig, M. (1995). *Banal nationalism*. Los Angeles: Sage.
- エアル、アストリッド (2022) 『集合的記憶と想起文化——メモリー・スタディーズ入門』水声社。[原著：Erll, A. (2017). *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen: Eine Einführung*. 3. Stuttgart: J.B. Metzler]
- 浜井祐三子編 (2017). 『想起と忘却のかたち——記憶のメディア文化研究』三元社。
- 石田雄 (2004). 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店。
- 板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔編 (2011). 『東アジアの記憶の場』河出書房新社。
- 春日太一 (2021). 『大河ドラマの黄金時代』NHK出版新書。
- 金瑛 (2020). 『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房。
- Leccardi, C. (2016). Memory, time and responsibility. In A. L. Tota and T. Hagen (Eds.), *Routledge*

- international handbook of memory studies (pp.109-120). London and New York: Routledge.
- Mills, C. W. (2015). Global white ignorance. In M. Gross and L. McGoey (Eds.), *Routledge international handbook of ignorance studies* (pp.217-227). London and New York: Routledge.
- ミルズ、チャールズ・W (2022). 『人種契約』(杉村昌昭・松田正貴訳) 法政大学出版局. [原著: Mills, C. W. (1997). *The racial contract*. Ithaca and London: Cornell University Press]
- モーリス・スズキ、テッサ (2014). 『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』(田代泰子訳) (岩波現代文庫) 岩波書店.
- 野家啓一 (2005). 『物語の哲学』(岩波現代文庫) 岩波書店.
- 岡真理 (2000). 『物語／記憶』(シリーズ 思考のフロンティア) 岩波書店.
- Olick, J. K. (2010). From collective memory to the sociology of mnemonic practices and products. In A. Erlil and A. Nunning (Eds.), *A companion to cultural memory studies* (pp. 151-161). Berlin and New York: De Gruyter.
- Olick, J. K. (2011). From “collective memory: The two cultures.” In J. K. Olick, V. Vinitzky-Seroussi, and D. Levy (Eds.), *The collective memory reader* (pp.225-228). Oxford: Oxford University Press.
- Plate, L. (2016). Amnesiology: Towards the study of cultural oblivion. *Memory Studies* 9 (2), 143-155.
- ルナン、エルネスト (2022). 『国民とは何か』(長谷川一年訳) (講談社学術文庫) 講談社. [原著: Renan, E. (1887). *Qu'est-ce qu'une nation?* In E. Renan. *Discours et conférences* (pp.277-310). Calmann-Lévy]
- リクール、ポール (2004). 『記憶・歴史・忘却 上・下』(久米博訳) 新曜社. [原著: Ricœur, P. (2000). *La mémoire, l'histoire, l'oubli*. Paris: Seuil]
- リースマン、キャサリン・コーラー (2014). 『人間科学のためのナラティブ研究法』(大久保功子・宮坂道夫監訳) クオリティケア. [原著: Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks: Sage]
- Rigney, A. (2016). Cultural memory studies: Mediation, narrative, and the aesthetic. In A. L. Tota, and T. Hagen (Eds.), *Routledge international handbook of memory studies* (pp.65-76). London and New York: Routledge.
- サイド、エドワード・W (1993). 『オリエンタリズム 上・下』(板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳) 平凡社. [原著: Said, E. W. (1978). *Orientalism*. New York: Pantheon Books]
- Smith, A. (1996). Memory and modernity: Reflections on Ernest Gellner's theory of nationalism. *Nations and Nationalism* 2 (3), 371-388.
- Thomas, B. (2016). *Narrative: The basics*. London and New York: Routledge.
- Thornham, S. and Purvis, T. (2005). *Television drama: Theories and identities*. New York: Palgrave Macmillan.
- 鶴田想人 (2023). 「無知学(アグノトロジー)の現在——〈作られた無知〉をめぐる知と抵抗」『現代思想』51 (7), 24-35. 青土社.
- 山名淳編著 (2022). 『記憶と想起の教育学——メモリー・ペダゴジー、教育哲学からのアプローチ』勁草書房.
- Yuval-Davis, N. (1997). *Gender and nation*. Los Angeles: Sage.